

講演会「森浩一の考古学」講演録2

森浩一の考古学－遺跡保存をめぐる実践と理念－

宮川 渉

ただ今ご紹介いただきました宮川です。

今日は、伝説になってしまった森浩一先生の神話を語るのではなくて、生身の森浩一という方のお話をしたいと思います。

先ほど、今会場にお見えになっている森先生の淑子夫人にお目にかかりました。今日は、森さんの悪口を言うかもしれませんが、とお断りを申し上げたのですが、どうぞ何でもどンドン言ってやってください、とご諒承をいただきました。

後でお叱りを受けるようなことを申しあげることになったら、その時はお許しくさいますようにお願い申しあげて、話をすすめたいと思います。

わたくしは1932年生まれで、1928年にお生まれの森さんとは四つ年下です。最初にお目にかかったのが、1947年の黒姫山古墳の調査の現場に行った時でした。その時に森さんの魅力的な人柄に惹かれて、古い言い方をいたしますと、兄^{けい}として仕えたいという気持ちが自然にわいてきました。そして、ずっと森さんに兄事してきましたので、「森先生」とかしまってしまいますと、かえって他人行儀になってしまいますので「森さん」と呼ばせていただきます。

1. 荒廃する遺跡の緊急調査で鍛えられた考古学者の「勘」

戦時中から敗戦直後の遺跡、とくに古墳の破壊や荒廃はそれはひどいものでした。そうした遺跡や古墳に対する調査というものは、ほとんどが緊急調査だったわけですが、そういう調査の現場で森さんからいろいろとご指導をいただいて、考古学世界へ脚を踏み入れてきました。先ほどご紹介いただいたように、成人してからは歯科医師という職業の方向にいったのですけれども、半分は考古学の世界につかっているという経過をとってまいりました。

わたくしのレジュメは枚数が少し多いのですが、森さんのことについて書いておりましたら、いろいろ思い出すことも出てまいりまして、長いものになってしまいました。話の不十分なところや触れられなかったところは、これをお読みいただければと思います。

森さんがその当時、考古学者として成長していかれたかという過程は、遺跡との運命的な出会いにあった、ということをはば書いてあります。

泉北丘陵の須恵器の窯跡群や堺市四ツ池遺跡の話などは、スペースの関係で省略していますが、敗戦直後の非常に荒廃した遺跡の状態のところに行き合わせた時、その遺跡から発せられている声を森さんがどのように聞いて、どういように遺跡に対処し調査したか、例えばレジュメに挙げておきました黒姫山古墳、割愛しましたがウナナベ古墳の陪塚・大和6号墳、和泉黄金塚古墳の調査などから、そのことについて推測することができると思います。

先ほど、寺沢知子先生が、京都の垣内古墳の調査の際、ブルドーザーが工事を進める中、墳丘が変形を受けてなかなか主体部が検出されないでいる時、森先生が的確に主体部のポイントを見つけられた、というお話をされていましたが、それには、わたくしのレジュメに書いておりますように、敗戦直後の昭和 20 年代前半の枚挙にいとまがないほどの緊急調査の体験が森さんの中に生きていて、垣内古墳調査の緊急な状態の中でも的確にチャンスをつかむ「勘」を身につけておられたのではないかと指摘されます。

森浩一 『僕は考古学に鍛えられた』 筑摩書房 1998 年

2. 既成に権威を否む森学学風には敗戦体験が

森さんはよくわたしたちに、既成の権威付けられた学説や概念にとらわれたり、惑わされたりしないで、事実関係をよく見て自分の頭で考えろ、ということをいわれていました。

森さんの業績の中で三角縁神獣鏡について、独自の見解を示されたこともそうだと思います。また、戦時中の絶対主義的な天皇制の呪縛の影響は、敗戦後も天皇陵の問題を取り上げようとする研究者が少ない中で、真正面から天皇陵に疑義を投げかけられた功績は大きいと思います。

そうした今までの既成の学説や権威に対して、果敢に立ち向かっていく森さんの理念や主体性は、敗戦直前の旧制中学では軍国主義教育と学徒動員による工場での労働、また、敗戦になっても戦争に対する戦争責任を明確にしないままズルズルアメリカ占領軍の進駐を迎えた敗戦日本の社会と、当時の中学生の目線から見た右往左往する大人たちの対応のあり方への不信感がそうさせたのだと思います。

わたくし自身も軍国少年であり、そうした体験をしてきましたので、皇国日本から敗戦国日本への 180 度価値観が転換した時代に生き、それまでの皇国史観で縛られてきた既成の権威や概念の、脆く空疎なものであったか目の当たりにした若者として、自分の頭で考えていくことの大切さを培われ、そうした学風へと発展させていたれたものであることがよく分かります。

ここで私事にわたりますが、わたくしは論文を書くときには通常、西暦を使うのですが、今日は「昭和」の元号を用います。といいますのも、昭和 20 年で敗戦になって、それで戦前と戦後という大きな文化史的な区切りができましたので、今日の話では昭和ということに通させていただきたいと思います。

それからもう一つ、今日は時間の関係で森さんと陵墓問題については触れることはできませんが、古墳の話の中で天皇陵の名前が出てきます。それらはその当時の認識の段階として、当時のままの天皇陵名で話をすすめたいと思います。

3. 百舌鳥・七観古墳調査から森さんとの出会いへ

わたくしは森さんと出会う前に、百舌鳥古墳群の中の履中陵の陪塚の位置にある七観古墳で遺物が一部露出している現場にいきました。当時、大阪府立農学校の 2 年生で昭和 21 年の秋のことでした。



図1 森先生（写真は以下敬称略）
津堂城山古墳（1980年7月 宮川撮影）



図2 七観古墳第1 塚の調査（1947年 樋口隆康撮影）
後列左 岡崎敬 同右 横山浩一 前列右 宮川

七観古墳の墳丘の中央には、戦時中旧日本軍が高射砲陣地を構築しようとして直径が約5 mもある大きな竪穴を掘ったまま放置されていました。その墳丘断面の一箇所に鉄錆が露出しているのを発見し、一塊の錆び付いた鉄鍬を掘り出し学校へ持って行ったところ、歴史の教諭が京都大学国史科を出られた福島雅蔵先生（後に花園大学教授）で、京都大学考古学教室に持参され、梅原末治教授の指示で福島先生と大学同期の樋口隆康先生と他に岡崎敬、横山浩一の両先生が調査にこられることになりました。また、この他にも坪井清足、榑崎彰一先生など、後に日本考古学界で主導的な役割を果たされる方々の若き日に接することができたことも人間関係の得難い財産でした。

七観古墳では、多数の鉄鍬、刀剣、馬具、甲冑などが発掘されましたが、中でも馬具の鐙は初期的様相を示し、また金銅装帯金具は學術発掘資料として、日本で初めて短甲に装着の状態を検出されたという成果がありました。調査が一段落して、京都大学考古学教室の陳列館を見学をしましたが、その時、梅原末治先生から“中学生にしてはよくやるなあ”とお褒めのお言葉を頂戴しましたが、それから7年後に梅原先生の文化財に対するお考えに、苦い思いをすることになります。

わたくしは昭和18年末から19年頃、末永雅雄先生の『大和の古墳墓』を読んで古墳に興味を持ち、独りで飛鳥地方の横穴石室の古墳を巡り歩いたり、後藤守一先生の『先史時代の考古学』を従兄弟からもらい、日本には縄文時代や弥生時代のあることを知っていました。人並みの軍国少年でもありましたが、国民学校（小学）6年生で習う『国史』が天孫降臨の神勅から始まる神話教育で、自分の知っている縄文や弥生時代はどこにも出てこない、先生に質問したくてウズウズしていましたが、そうした質問をすれば何かとんでもないことになりそうな気がして、とうとう質問できませんでした。そうした鬱々とした考古学の知識と『国史』との乖離感が敗戦とともに吹き飛んで、疑問を感じた自分の方が正しかったんだ、という気負いが中学2年生を衝き動かし、調査の裏方として敗戦後であらゆる物が払底してない中、シャベルやツルハシ、ハシゴなどを苦勞して借り集め、自転車に括り付けて一人で七観古墳まで運び調査の進行をサポートするエネルギーとなりました

樋口隆康・岡崎敬・宮川彦 「和泉七観古墳調査報告書」『古代学研究』第27号 1961年

ただ、敗戦後の百舌鳥古墳群での最初の学術調査が、地元をフィールドワークにしている森さんの手から洩れ、京都大学によっておこなわれたことは森さんにとってトラウマになっていたことを、後年、知るようになります。

この七観古墳の調査体験をした直後に、当時、南河内郡黒山村の黒姫塚古墳（現・堺市美原区）の調査の話聞いて、黒姫山古墳まで自転車で出かけ、発掘調査の現場で森さんと初めて出会いました。昭和22年の12月末か翌23年の1月頃だったと思います。

黒姫山古墳の調査現場で、まだ同志社大学の予科のアンパン帽の森さんにお目にかかって、その人柄に惹かれ古い言葉になりますが兄事する気持ちが自然にわいてきました。それ以来もう67年にもなりますが、森さんという方はそうしたカリスマ性のある人間的魅力にあふれた人でした。

4. 森さんと考古少年たち

黒姫山古墳調査の発端は、戦時中粗悪化する軍用機のガソリンのオクタン価を高めるために松の根から「松根油」を採るため、前方部に掘った穴が鉄製の甲や短甲を埋納した石室を掘り当てていました。それを、敗戦直前の昭和20年5月に森さんが地元を回って知り、22年12月からの調査に繋がられています。

この調査にわたくしは23年の1月頃から参加し、考古学好きの少年達と古墳近くのお寺の本堂に宿泊させてもらいながら、森さんの指導で墳丘最上段の円筒埴輪列を全部掘り出すなど、意欲的な調査がおこなわれていました。

この時の円筒埴輪列の発掘調査で、その外側にキヌガサ型埴輪が約3.6mの等間隔で並んでいたことから、森さんは「これは古墳を造るとき尺度を使っていたことを証明することになるかもしれん」と熱っぽく話されていたことを記憶しています。

そのときに、古墳築造の尺度に目を向けられたのは、古墳築造企画の尺度論として研究史上、注目される考え方をすでにされていたことに、わたし自身、後年になってから尺度論に参入して、その感性の鋭さにあらためて驚きました。

末永雅雄・森浩一 『河内黒姫山古墳の研究』 大阪府教育委員会 1958年

その当時、敗戦直後の各地の遺跡の荒廃はひどいものでしたが、百舌鳥古墳群に限っても、たまたま行ってみると古墳が土取りで破壊され、散乱した遺物に行き合うといった状態でした。

森さんしてみれば、その当時考古学を専攻して正規の考古学調査の経験もないまま、すぐ調査に入らなければ目の前で消えていく遺跡があちこちにある、という状況に向かい合っただけです。当時は行政もまったく機能していない時代でした。

そうした中、考古学の好きな少年たちが集まり、今日この会場にお見えになっている仏教大学の名誉教授の杉本憲司先生も、堺中学校（旧制）で森さんグループのお一人でした。

森さんのカリスマ性に惹かれて集まった少年たちをうまく束ね、調査現場で上手に発掘調査の戦力にまとめ上げていくリーダーの才覚は、天賦のものがあったと思います。



図3 黒姫山古墳の調査（1948年1月）
前列右 森浩一 同左 杉本憲司 後列中央 宮川



図4 カトンボ山古墳出土品
東京国立博物館所蔵・写真提供

図3の写真は、やや不鮮明ですが、堺中学の森さんのグループの一人、米谷さんが撮った黒姫山古墳での写真です。

この当時は、森さん自身がまだ成人に達していない19歳頃だと思いますが、こういう青年や少年たちが崩壊していく遺跡や破壊される古墳の緊急調査に参加し、重要な役割を果たしたスタッフである、そういう時代でした。

例えにやや問題がありますが、その辺にいる15、6歳の元気な少年を集めて鉄砲を渡し、弾丸の込め方と撃ち方だけ教えてすぐ戦場に行き実戦する、指揮官は二十歳そこそこの森浩一小隊長、といったアンバイです。

百舌鳥では七観古墳の調査の後、昭和24年にカトンボ山古墳の緊急調査があります。この頃は森グループの一人になっていたわたくしは、春休みのある日、森さんから土塔の近くで須恵器の窯址が出たということなので、見てきてほしい、と頼まれ、ついでだから百舌鳥古墳群をパトロールするつもりで自転車で出かけました。

当時、国鉄阪和線の百舌鳥駅を西から東に越え、陵墓参考地の御廟山古墳を右に見て道を東に進んでいくと、驚いたことに残骸になった古墳の墳丘が今まさに削り取られ破壊されている、という状況の現場に行き当たりました。その頃はまだ名前もはっきりしていなかった古墳ですが、壁土屋さんが古墳の墳丘を削り取って粘土質の土を篩でふるい分けて、壁土を取っていました。古墳の墳丘の封土は、粘土質の土を交互に混ぜて築造していますから、壁土には最適なんです。

大きな四角い篩で封土の中の小石など邪魔な混じりものをふるい分けて、横にぶちまけて積んでいるわけです。その日は日曜日なので作業はしていなかったのが幸いしました。ふるい分けられて積んでいる邪魔ものというのが、子持ち勾玉だとか半分に割れた小型鏡や、滑石製の勾玉、刀小、白玉な

ど石製模造品が山になっていました。もうただ飛び上がるような光景が目飛び込んできました。壁土屋さんには無断でしたが持っていた風呂敷に手当たり次第に入れて拾い集め、石ころのように積み上げている重い鉄斧群は持って帰れないため近くの家で頼んで預け、森グループの田中英夫、杉本憲司のお二人に連絡して、その日の夜、収集した遺物を持って狭山の森さんのお宅へ行きました。

その頃森さんは同志社大学の学生で、まだ京都から帰ってこられていませんでした。少し待って帰ってきた森さんが遺物を見たとき、「お前ら、これどこで盗掘してきたんや！」というのが第一声でした。

それまでのいきさつを話して、大変な数の石製模造品を水洗いして整理しながら緊急調査の打ち合わせをして、すぐに調査に入りました。

この古墳は後に絵図や古い古墳名の記憶から、カトンボ山古墳と名付けられましたが、この時採集された遺物はその後、末永雅雄先生と森さんの協議で上野の東京国立博物館（以下、東博）に収蔵されました。最初、現地で子持ち勾玉や石製刀子、石製斧頭、割れた鏡などを素手で鷲掴みにして拾い集めた感触は、今でも鮮明に覚えています。遺物に対する古物趣味的な執着はあまり感じませんでした。2年前に体験した七観古墳の調査で、発掘した遺物は公的なものだから私的にしてはいけない、という考古学調査の基本的な躰を学んでいたことが幸いしました。

現地には別に採集されたものが堺市や個人蔵として点在していますが、東博の平成館の考古展示室には、石製模造品の一部や大形・小形併せて10点の鉄斧群が常設展示されています。

森浩一・宮川 彦 『カトンボ山古墳の研究』 古代学叢刊 第1冊 1953年

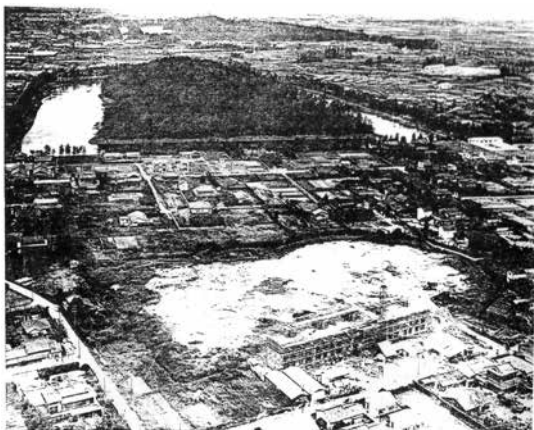


図5 破壊された百舌鳥大塚山古墳（1955年）



図6 百舌鳥大塚山古墳調査に参加した高校生
（1950年 宮川撮影）
後列中央 森浩一 左 青田暁男 右 中西弘光
前列 和田耕治

地元の堺に安全に収蔵され保管できる施設が当時なかったため、あの時代はそれが最善の策だと考えられたんです。もしあの時、壁土取りの現場を通らなかったら、あれだけの遺物が雲散霧消してどうなっていたか分からないことを思うと、堺に生まれ古墳好きだったために残る機会をつくることが出来た、これも巡り合わせなのでしょう。

古墳と見ればてっとり早い土取り場として破壊していく、という無政府状態のような状況が昭和20年代に続きました。“国破れて山河あり”という言葉がありますが、今ではだれもが文化財として認める古墳たちを、その場限りの儲け仕事でいとも簡単に壊していく、敗戦の荒廃は生き残った日本人の心まで破壊していた時代でした（図5）。

昭和25年に入りますと、履中天皇陵の前（南側）にあった百舌鳥大塚山古墳がだんだん土を取られ、蚕食が激しくなってきました。大塚山古墳は後円部の直径が100 m余り、墳丘の長さが167 m前後ある五世紀前半の前方後円墳で、百舌鳥古墳群の中では仁徳陵や履中陵があるため相対的に中規模の古墳として位置付けられています。他の地域にあれば地域の王の古墳として最大規模の古墳に位置付けられる大前方後円墳です。

この大塚山古墳が、事前調査をされることもなく土取りの破壊が後円部に及んできたのに、大阪府も堺市も行政的に対応する機構や法律がないため、森さんを調査団長として新制高校発足間もない高校生たちが自主的にボランティアとして手弁当・交通費持ちで発掘調査に参加しました（図6 百舌鳥大塚山古墳調査に参加した高校生）。

図2にある写真は、わたくしが撮った写真で、森さんと参加した高校生達が写っていますが、この四人の中で生存しているのが和田耕治君と撮影者のわたくしだけで、時の流れを感じます。今では携帯電話などで撮られた映像があふれるような時代ですが、この頃は写真フィルムや現像・焼付け代がとて高く、ブローニーのフィルム1本を買って現像・焼付けすると半年分の小遣いが飛ぶほどでしたので、こうした記念撮影の残っているのは希有なものなのです。こうした高校生達が森さんの指揮の下で、戦後の考古学史に残る重要な調査を支えていました。

宮川 渉 「百舌鳥大塚山古墳」『明日への文化財』第31号 文化財保存全国協議会 1992年

森 浩一 「失われた時を求めて－百舌鳥大塚山古墳の調査を回顧して－」『堺市博物館報』第22号 堺市博物館 2003年

その後も百舌鳥では、やはり土取りと開発で中世に城砦に使われていた城ノ山古墳が破壊に直面し、その緊急調査があり、今回「森浩一の考古学」ハリス理化学館同志社ギャラリーにも関連の調査資料が展示されています。その頃の森さんは、いつ勉強するんだろうと思われるほど、次つぎと起こる緊急発掘に対応されていた20代の考古学生活が、古墳も含めた遺跡に対してどう向き合っていくか、森さん独自の哲理や情念の形成になっていったのだと思います。

森 浩一 「百舌鳥城ノ山古墳の調査」『堺市博物館報』第23号 堺市博物館 2004年

5. 七観古墳の消滅

昭和22年に発掘調査された七観古墳が、同27年になって墳丘が道路工事用の土取り工事のため破壊されている現場に行き合わせました。昭和24年の法隆寺金堂壁画の焼失によって、同25年には文化財保護法が制定されていましたが、こうした古墳の破壊に歯止めをかけいくまでにはまだまだ機能していませんでした。

七観古墳の現場では、多数の刀剣が埋納されている遺構が露出していて、緊急調査が必要な状態でした。当時、大阪歯科大学生だったわたくしは講義をサボって、考古学友達の中西弘光君に協力を頼み、土取りが進行する中、遺構を発掘し実測図の作製を中西君にお願いしました。中西君の奥様は著名な紙人形作家の中西京子さんで、弘光君はプロデューサーとして京子さんの仕事を支えて来られましたが、2010年に他界されました。

わたくしとしては、一つの遺跡の調査は一つの学術組織または個人に継続的に統一しておこなわないと、調査記録や出土遺物の分散が生じ、まとまった報告書が出せない、という危惧をもっていましたので、終始一貫した調査にするべく考えたからでした。

調査した遺物の大半は京都大学に苦勞して搬入しましたが、工事が進行している現場の近くに一時保管をしていた刀剣類の出土品が、一部持ち去られるという残念なこともありました。

この調査と遺物の京都大学への搬入について、森さんから「そこまで京都大学に義理立てせんでもええやないか」といわれましたが、七観古墳が巨大古墳・履中陵の陪塚の位置にあり、調査内容が初期的な馬具・鐙の検出、金銅装帯金具が短甲の胴回りに着装されたままの状態出土するなどの重要な発見があったことも、森さんとしては残念な思いを持たれていたのではないかと思います。

宮川 渉 「戦後の調査にいたる経緯と戦跡としての七観古墳」『七観古墳の研究-1947年・1952年出土遺物の再検討』

坂口英毅編 京都大学大学院文学研究科 2014年

6. “イタスケ古墳を護ろう”－錯綜する理念－

昭和20年代の後半、大阪市立天王寺美術館の北館西側の一室が、末永雅雄先生をはじめとする考古学研究者の研究室として提供されていた時期がありました。今、その部屋は空調機械室になっていますが、週末には大阪周辺の若い研究者や学生が集まり、和泉黄金塚・黒姫山・和泉大塚山の各古墳などの遺物の保管と整理、また研究集会を開いて勉強や情報交換の場にもなっていました。ここには黄金塚古墳から出土した景初三年銘のある重要文化財の画文帯神獸鏡も一時保管され、手にとって見ることもできました。

集会が終わると、森さんは若者宿のオサミたいに、若い研究者や学生たちを引き連れて眼下に広がる新世界のジャンジャン横町に繰り出すのがお好きでした。

昭和30年の9月はじめ、森さんから百舌鳥古墳群のイタスケ古墳（この段階ではまだ古墳の正式な名称は固定していなかった）に橋を架ける工事が始まって、今度はイタスケ古墳が潰されるらしい、という話が出されてきました。この情報は、当時同志社大学を卒業されて、大阪府立泉大津高校に教

員として就職されていた森さんに、イタスケ古墳の近くに住む同高校の教員の方から知らされたことが後の新聞に報道されています。

その場に居合わせた数人は、戦後の凄まじい古墳の破壊と緊急調査を体験してきただけに、“イタスケ古墳は堀をめぐらせた前方後円墳としては陵墓以外に最後に残された古墳だ。この前には百舌鳥大塚山が破壊され、今度イタスケ古墳が潰されたら、まともな前方後円墳は陵墓した残らないことになる。イタスケ古墳を護るために何とかしよう。”ということになり、“それぞれが最善と思われる方法と考え方で、イタスケ古墳を護ろう”とずいぶん大ざっぱな申し合わせだけで自然発生的にイタスケ古墳の保存運動が始まりました。その頃は、文化財とか文化財の保存とかいう概念も未成熟で、「文化財保存運動」というような用語すらなく、“イタスケ古墳を護れ”というメーデーのスローガンのような表現が新聞でも保存を訴えるビラにも踊るような時代でした。

イタスケ古墳の地主さんは素封家で、古墳をこのままにしておいても地元は発展しない、宅地造成をして家が増えれば人も集まりに賑わう、といったお考えのようでした。この古墳を買収したD建設会社は、当時古墳の堀の水利権が有るために、“池をめぐらせた住宅地”というキャッチフレーズで新聞広告し、売り出そうとしたようです。

古墳の周濠に橋を架ける、この工事が終わればダンプカーを入れて古墳の墳丘封土を掘削しダンプカーで運び出し、平夷され堀に囲まれた前方後円墳の住宅地が出現するはずでした。架橋の工事現場に進行状況を偵察に行きながら、橋が出来るまでの時間が勝負だ、と思いながらも成算はまったくない手探りの運動でしたが、今のように土木用の重機がまだ投入される前の時代であったのが幸いしました。

わたくしは、戦後の古墳の破壊状況をリストと地図を、手書きで添えて知り合いの研究者に送り支援を頼んだり、新聞社にも送り報道するよう手紙を書きました。また、まったく知り合いでもなかった堺市議会議員の方に駆け込みで訴えに走り、9月市議会に取り上げ質問していただくことに成功しました。これが、後に堺市が赤字財政の中にもかかわらず、史跡仮指定のため堺市長がD建設会社と直接交渉し、400万円の立て替え払いで買収するきっかけとなりました。

森さんは所属する大阪府高等学校教職員組合に働きかける一方で、東京にも出かけられ、当時若手の研究者で組織されたばかりの青年考古学協議会（以下、青考協）の親しい研究者中心に運動されていました。

大阪府教職員組合は、イタスケ古墳を買い戻すための10円募金を始め、当時としてははからずもナショナル・トラスト運動的な保存運動が起こってきたといえましょう。

わたくしは堺の大阪府立泉陽高等学校の同窓で、大阪市立大学の友人から同大学に来られていた見田石介先生に引き合わされ、見田先生の甥に当たる当時東京大学大学院の考古学の甘粕健さん（後に新潟大学教授・元文化財保存全国協議会代表委員、2012年8月4日死去）に紹介していただいて、東京での運動と連携ができるようになりました。

新聞各紙も大きく紙面を割いて、各社が飛行機を飛ばし空から見たイタスケ古墳の航空写真を掲載し、プレスキャンペーンとして世論を喚起する大きな役割を果たしました。

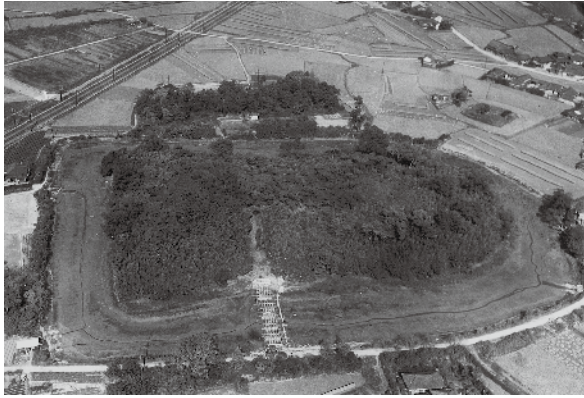


図7 墳丘への架橋工事が始まったイタスケ古墳
(1955年10月 朝日新聞大阪本社撮影)



図8 崩れ落ちたイタスケ古墳の橋
切り絵：加藤義明

まだ、テレビのなかった当時としては、地上から写真を撮っても森が写るだけの古墳が、空から撮影された古墳の全形と架橋中の橋の写った航空写真は新鮮で、視覚的にもテレビと同じような映像効果がありました。

9月はじめ、成算も具体的な運動論もないまま、ただやむにやまれない気持ちで自然発生的に起こした“イタスケ古墳を護れ”の運動は、二か月足らずの間にびっくりするような盛り上がりを見せ、スポーツ新聞にも文化財のニュースが掲載されるようになりました。

昭和31年には、「もはや戦後ではない」という言葉が出てきますが、戦後、無二無三に遺跡や古墳を破壊しても、心の痛みを感じなかったような敗戦の精神的虚脱状態から、この頃には、社会が文化財の問題を日本人の心の問題として捉えられるようになるまでに回復してきていたと思います。

新納泉 「ジャーナリズムと考古学」『岩波講座・日本考古学 7 現代と考古学』 岩波書店 1986年

10月29・30日に橿原市で日本考古学協会秋季総会で、森さんが百舌鳥古墳群の荒廃の現状を報告し、イタスケ古墳が破壊に直面していることを訴え、イタスケ古墳を直ちに史跡に仮指定するよう文部省、国文化財保護委員会、大阪府教育委員会に要請する決議が出されました。その会場の前で、わたくしは総会参加者に保存要望の署名をしていました。そこへ梅原末治先生が会場の武道館から出てこられたので、「先生、署名をお願いします。」と声をかけて署名簿を差し出しました。

梅原先生とは、この7年前の七観古墳調査の際、京都大学考古学陳列館を見学した時、お褒めのお言葉をいただいていたので、お忘れになっていたとしても、“署名は立場上できないが、頑張りたまえ”ぐらいはおっしゃっていただけ、とっていたら、両手を前に出して制止するようにされ、“君イ、前方後円墳の一つや二つ潰れるくらいで、そんなに大騒ぎすることないよ”と言われたのに、啞然としてしまいました。

七観古墳以来、尊敬していた梅原先生のまったく予期しないお言葉に、「梅原先生には、遺物学はあっても、遺跡学はないなあ。」と砂を噛むような索漠とした気持ちと、考古学界の大御所といわれた梅原先生への苦い思い出は、今も忘れられません。

この秋の学会総会の機会に集まった青考協の若い研究者にイタスケ古墳の問題を訴え、青考協イタスケ古墳対策委員会がつくられることになり、甘粕健さんは東京で青考協の若い研究者たちと精力的に運動をすすめるかたわら、わたくしと手紙で連絡を取り関西と東京の情勢の情報交換をしていました。

ただ、“京都では、今度の「イタスケ古墳を護れ」という運動は、発掘の主導権を握るためのパフォーマンスだという噂があるがどうなのか”と、わたくしは立命館大学日本史研究会のTさんから直接問い糾されたことがありました。

もちろん、それは直ちに否定しましたが、地元での運動のすすめ方や方向性に明確な理念が貫徹されていた、とは言いがたい弱さがそうした噂を生むことにもなったと思います。

当時、堺市の文化財保護委員長をされていた岡村兵平衛氏（かなりの年輩でした）は、イタスケ古墳を視察した現場で、“百舌鳥には仁徳陵や履中陵や大きな古墳がようけおまんがな。それに比べたらイタスケ古墳みたいなもんは、相撲取りとヤヤコみたいなもんや。潰れてもたいしたことおまへんで”と言いつちました。

敗戦後、あれだけの古墳が破壊され、郷土の歴史的なよすがが喪失したことを教訓としていない、その衝にあたるべき人がこんなことを言う、梅原先生ともども、私は記録に残しておきます。

穴沢味光 「梅原末治論」『考古学・京都学派』 角田文衛編 雄山閣出版 1994年

岡村さんはこの後、地元での堺市民に呼びかけた「堺市いたすけ古墳を護る会」が11月に結成された際、会長に就かれています…

ちなみに、イタスケ古墳という名前は必ずしも一般に定着していませんでしたが、「和泉国地誌」に「板鶴山」とあり、泉北郡百舌鳥村当時の「村役場の調査」で「イタスケ・五位鷲群棲ノ山」から特定して名付けました（『泉北史蹟志料 上巻』）。

7. イタスケ古墳の発掘の是非をめぐる葛藤

地元でのこうした動きは東京の甘粕さんに手紙で逐一報告していましたが、甘粕さんからは東京での状況が知らされてきました。

11月11日消印の速達の手紙には、三笠宮が宮と友人である和島誠一先生（当時・東京女子大学講師、後に岡山大学教授・甘粕健さんの伯父上・見田石介先生の友人）と文部省に行かれて、国の文化財保護委員会の斉藤忠氏とわたり合ったことや、文部省側が月の輪古墳（岡山県柵原町）の市民参加の発掘調査の再来を恐れ、今度のイタスケ古墳の運動は、民主主義科学者協会（進歩的な科学者や研究者が多く参加していた）の一派が、計画的に森等を扇動し、イタスケ古墳でも月の輪式（史的唯物論的な）発掘をやろうとしている、と放送しているようだ、と書かれています。

また、梅原・斉藤会談で、掘らせないで済むような手を打ったか、いよいよの時に梅原・小林行雄がイニシアティブを取り、末永雅雄氏を排除して発掘をやる計画ができたのではないか、という梅原派：末永派の確執という対立構図まで組み込んだような生々しい情報が伝えられてきました。

森さんは誰かの扇動によって踊り出すような人ではありませんし、それよりも、敗戦後あれだけの無残な古墳たちの破壊に、やむにやまれず立ち上がった地元の研究者の気持ちや百舌鳥古墳群の状況が、東京の文部官僚や文化財保護委員会の人たちにはまったく分かっていなかったのだと思います。

当時の社会情勢は、昭和 27 (1952) 年の皇居前広場・血のメーデー事件。同 28 年石川県内灘米軍試射開始。同 29 年ビキニ水爆実験・第五福竜丸事件。同 30 年立川基地拡張反対、砂川闘争。など政治的社会問題と先鋭化した左翼的な運動が頻発していました。

東京の中央官庁（文化庁ができたのは昭和 43 年）が、「イタスケ古墳を護れ」の運動を月の輪古墳の再現とか、左翼筋が森等を扇動して云々、という見方をしていたとすれば、組織的でも政治性も持たない草の根的な初めての文化財保存の運動を、東京から当時の社会情勢を見ていた官僚的な政治的偏向の“色眼鏡”を通して、イタスケ古墳の保存運動にも向けられていたことがよく分かります。

この東京での生々しい情報が書かれた手紙を、森さんに見えることには少しためらいがありました。それは、梅原先生がイタスケ古墳を発掘する計画云々と書かれているところでした。

運動をしていた当時、狭山のお住まいだった森さんは、堺在住の田中、杉本両氏と宮川らを南海高野線堺東駅周辺に集めてよく協議しました。

今はもうなくなりましたが、堺地方裁判所前の北側にあったコモナという喫茶店が共同謀議の場所でした。そこで、意を決して甘粕さんのこの手紙を森さんに見せたところ、梅原・小林発掘計画云々という件を読んだ森さんは、「梅原に掘られるんやったら、俺たちで掘ろう」と激昂し、わたくしは“しまった、甘粕さんの手紙は見せるべきではなかった”と思いつつ、「発掘だけは言い出したらあかん。残すことに徹するべきや。」と必死の思いで反対しました。

今この段階でわれわれが発掘すると言い出したら、ここまでやってきたことが一切水の泡になるだけでなく、社会的に強い批判と非難にさらされることになる。

立命館大学の T さんが指摘していた発掘の主導権をとるために、護れという運動を始めたのはいいか、という噂を裏付けてしまうことになる。

大阪府教職員組合が始めた買い戻すための 10 円カンパや、東京で青考協の若い研究者が中心になって動き出している運動を裏切る結果になる。

それにもましてわたくし個人の感触としては、甘粕健さんと構築してきた友情や信頼関係がまったく失われてしまうことの大きさを無視することができませんでした。

わたくしは、そうした理由を挙げて、発掘するということだけは絶対言い出すべきではない、と必死になって森さんに向かい合い止めました。黒姫山古墳の現場で初めて森さんにお会いし、兄事するというのを心に決めて以来の一番の危機的な状態でした。

自分でもよくあれだけ森さんに楯突いたものだと感心するのですが、森さんの不興を買いグループから切られるか、どうしてもだめなら自分からグループから離脱することもやむを得ないか、と覚悟を決めての説得でした。

緊張したとても長い時間のようにも思ったのですが、最後に森さんが「わかった。発掘のことはこれ以上言わん。」と撤回してくれた時は、ホッとしました。わたし自身、兄事すると決めた森さんに

これだけ真剣に対峙し、森さんを向うに回して一歩も引けを取らずに頑張れたものだ、と思う反面、ことわりを尽くして話せば聴いてくれる人だということがよくわかりました。

堺の喫茶店に集まり、この緊迫した話し合いをしていた11月12日の同じ日に、新聞のスクラップから拾い起こしますと、大阪府教育委員会は文部省文化財保護委員会と史跡仮指定の打合せをおこなひ、新聞各社は14日付け夕刊で「イタスケ古墳の史跡仮指定が決まった」ことを報じています。

もしあの時、森さんが発掘を表明していたら、“イタスケ古墳を護れ”と立ち上り、戦後最初の文化財保存運動の第一ページを開いたという栄誉は、地に落ちていたと思います。森グループにとって、この二日間が間一髪、一番の危機でした。

宮川渉「イタスケ古墳－文化財保存の理念をめぐるたたかい」『明日への文化財』36・37合併号 文化財保存協議会 1995年

甘粕健「イタスケ古墳保存運動と私」『歴史家が語る・戦後史と私』吉川弘文館 1996年

イタスケ古墳を護ろうと運動が始まった頃は、イタスケ古墳の実測図もなく、発掘されて遺物が出土した古墳でもないために学術的な情報がほとんどない中で、残すことがなぜ大切なのかと説明するのに苦労しました。

当時は、掘ってみて立派な遺物が出れば残したらいいし、大したものが出なければ壊してもやむを得ない、というような遺物主義的な考え方が学界でも当たり前のような学術水準の時代でした。

前方後円墳の外形研究がすすんだ今では、発掘しなくても墳丘外形から様々な情報が読み取れるようになりました。

イタスケ古墳は後円部の直径1/2（半径）の長さの前方部を付けた設計・企画で築造された前方後円墳です。そのために墳丘全体がズングリして見えます。わたくしたちがすすめてきた外形研究では、後円部直径約100m、墳丘長約150m、前方部の幅約113mで復元される大きさですが、同型同大の古墳には、古市古墳群の宮山古墳、丹波雲部車塚古墳、大和掖上罐子塚古墳、播磨行者塚古墳などがあり、大王政権の負託を受けて主要交通路などを管掌する、初期的な軍事官僚のような性格を持った被葬者の古墳であると指摘されます。

宮川渉「4区型前方後円墳の被葬者とその属性－古墳時代社会の二重構造的な身分秩序－」『古代学研究』第180号

森浩一先生傘寿記念論文集 古代学研究会 2008年

8. 市民運動の成果と政治的情勢もその背後に？

森さんが“梅原先生がイタスケ古墳の発掘を計画している”という情報に激昂したのは、百舌鳥古墳群をホームグラウンドとしていた森さんの知らない間に、梅原先生の指示で京都大学によって戦後最初の学術調査として七観古墳の発掘調査を行われてしまったという悔しさが、イタスケ古墳に触れるとは絶対に許せない、という感情になってほとぼり出たのではないかと思います。

森さんが亡くなる少し前に出版された『天皇陵古墳への招待』（筑摩書房 2011年）の「百舌鳥陵山古墳と陪墳」（187頁）の中で、戦後の調査への批判と「…宮川渉氏が協力して発掘をおこなった。」と書かれていて、七観古墳に対する森さんの屈折した思いが強いものであったことをあらため

て感じました。

敗戦後に次々と破壊に直面した遺跡・古墳の緊急調査に没頭した体験から身に付けた遺跡・古墳に対する哲理や情念、これが遺跡・古墳を客観的な対象物として相対化し、研究者としてどうかかわっていくかという立場よりも、誰にもまして、自分が調査して記録を取って残さなければ、遺跡そのものが存在したことすら分からなくなってしまう、という危機感が、森さんの遺跡・古墳の保存の理念、あるいは実践哲学の方向性を形づくっていったのではないのでしょうか。

イタスケ古墳は11月14日に仮指定が決まったあと、16日には宮崎県西都原古墳群に出向された帰りに、三笠宮が梅原末治先生の案内で雨の中イタスケ古墳を視察しました。

夜は大阪朝日新聞社本社講堂で「イタスケ古墳を護る講演と映画の会」に出席され、日本オリエント学会長として三笠宮と、京都大学水野清一教授、立命館大学奈良本辰也教授が一般聴衆に講演し、ダメ押しのインパクトを与えました。

12月7日には大阪市内で青考協イタスケ古墳対策委員会から森さんも参加し、「関西古墳を守る会」（会長：樋口隆康京都大学教授）を発足させ、関西布学界としても文化財問題に対処していく姿勢が生まれてきました。

12月12日にはイタスケ古墳を宅地造成しようとしたD建設会社と堺市長が、墳丘と橋を400万円で購入する契約を結び、20日に堺市の立て替え払いで所有権の移転登記も完了して、昭和31（1956）年5月15日付けで国史跡として官報告示され、森さんが「今度はイタスケ古墳が潰されるらしい」と言うてから3か月余りで、史跡仮指定にもっていけるまでに運動は成功しました。

研究者と市民が結びついて成功した文化財保存運動、というイメージの他に、当時の社会情勢が反映した「政治的判断」がその背後にあった可能性も見逃してはならない、と思います。

青考協や大阪府教職員組合などが集めたカンパは、同31年11月29日付けで利息とも35万2907円になり、堺市に寄託されました。当時、地価が安かったとはいえ、買取価格の一割近くの金額を集め、はからずもナショナル・トラスト運動のはしりのような運動になっていたと思います。

ただ、このカンパは買取資金に繰り入れられることなく、昭和62（1987）年に他の寄贈分も含め、残高63万5635円が雑収入として一般会計に繰り入れられていることを知り、宮川他が堺市教育課長と面談して、将来、イタスケ古墳に関して必要な事態になった時は、市財政から支出する、という確

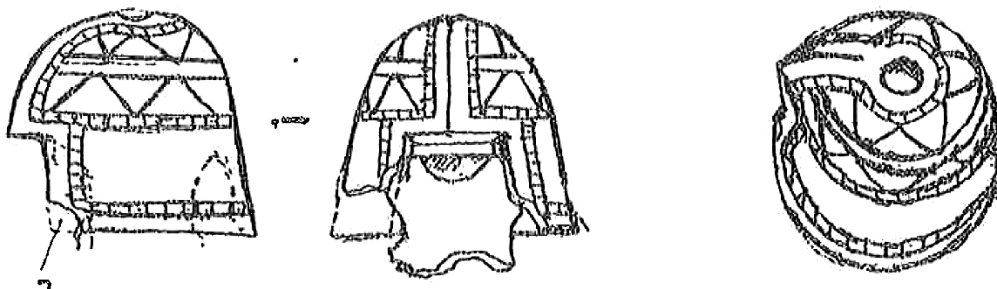


図9 墳輪冑のスケッチ

約を取っています。

現在、堺市の文化財のシンボルマークになっているイタスケ古墳出土の衝角付冑型の埴輪は、保存運動のさなかにある高校生と中学生の兄弟が盗掘したもので、図書館の金庫に保管されていたために、永らく市民が見ることもできませんでした。

森さんは「あの埴輪の出た位置を知っている。そのうち教えたわ。」と話されていましたが、その機会を逸したまま亡くなられてしまいました（図9 埴輪冑のスケッチ）。

9. 研究者主導の保存運動に徹して

イタスケ古墳の問題が起こってから7年後の昭和37（1962）年秋に、近鉄が平城宮跡の中、今の復元された朱雀門の北側一帯の場所に、電車の検車区を建設する計画のあることを新聞が報道し、全国的に建設反対と宮跡の保存運動が起こりました。

平城宮跡のような遺跡さえ残せないようでは、今後の日本各地の遺跡保存は絶望的になる、といった危機感が、あらゆる層の文化人や市民の意識を結集し保存運動のエネルギーとなってわき起こりました。

図10はこの問題が起こった直後の昭和37年秋、大阪朝日新聞社の本社講堂で開催された『平城宮跡保存』の講演会の司会者の方々と、森さんもその司会者の中におられます。

イタスケ古墳で文化財保存を体験した市民と社会は、「もはや戦後ではない」という意識とともに、文化財に対する価値観を持つまでに精神的なゆとりを回復してきたことを示しました。

関西古墳を守る会は、この平城宮跡保存問題以降、関西文化財保存協議会に発展し、東京をはじめ全国に各地での文化財問題に対処する「守る会」が結成されていきました。

昭和43（1968）年5月、京都大原三千院近くの宿舎に、関東で活動している文化財対策協議会と、関西文化財保存協議会の参加者たちが集まり、全国的に統一された文化財保存運動の組織をつくる会議が開かれました。

森さんも参加されるというので、わたくしの車で同志社大学新町キャンパスまでお迎えに行き、この会合に参加しました。その時の会議で議論された中で、保存運動の主体についての議論がありました。

森さんは「研究者の保存運動と市民の保存運動には違いがある。ある遺跡が壊されそうとしている時、市民の保存運動は遺跡が壊されてしまっても責任はないが、研究者の場合は壊される前に調査して、遺跡の学術的資料と記録を残す責任がある。そこが市民と研究者の保存運動とのかかわり方の違いだ（要旨）」と発言されました。

それに対して、山陰から出席していたある研究者から、「そういうことを言う研究者がいるから、遺跡は潰れるんですよ。」というきびしい批判が出されました。

その夜の会議が終わり、東山のご自宅まで車でお送りしましたが、森さんは憤懣やるかたない、という感じで「今後、こうした会には、一切出ないからな。」といつもとは違って言葉少なに帰られました。

イタスケ古墳の問題の時、甘粕健さんは私信の中で、「僕達にとっては地元を中心に、この古墳群

に対する関心を徹底的に高め、国民の心の内にある自分達の歴史に対する情熱を呼び醒まし、これを完全に保存するという正しい要求を大きくする以外に道はないと思います。」と書かれていて、後年結成される文化財保存全国協議会代表委員としての理念が語られています。

森さんはこれまでお話ししてきたように、多くの緊急調査を体験する中で研究者として自らの裁量で処理解決し、乗り越え積み上げてきた自負が、保存運動にもいわばトップダウン的に臨むことになられたと思います。

これに対して甘粕さんのボトムアップ的な市民運動としての保存運動とは、また違う性格を示すことになるのだと思います。

ここではどちらが正しいかどうかを決めるのではなく、この時代から後年に、東と西でそれぞれ日本考古学界の指導的立場に立たれたお二人が、遺跡保存をめぐる実践や理念をめぐってどう考えられ、どう対応されてきたかという生き方を、見る必要があると思います。

森さんが同志社大学に就かれる前の時代、わたくしが私的な人間関係の中で触れあい、体験してきた森さんの考古学の実践や、遺跡保存の理念と対処のあり方などを中心にお話ししました。

こういうことをお話ししておりますと、この教室のその袖から、「宮川君、君はそない言うけど、それは君の思い違いや。僕のホンマの考えはこうや。」と言いながら、森さんが出てこられるような気がします。

もう少しでも、生きていていただきたかった…

ご清聴ありがとうございました。



図 10 平城宮跡の近鉄検車区建設反対の講演会司会者団
(1962年秋 宮川撮影)
左から横山浩一・藤沢長治・森浩一
(朝日新聞大阪本社講堂)



図 11 宮川彦氏の講演の様子